

第六章
信
仰

第一節 信 仰

信仰の中心は祖霊崇拜であるが、人間とのかかわりのある天体、自然物やその現象の持つている威力に驚嘆し恐怖を抱き、それらのものにも霊が宿っていると、人格化し尊崇されたものもあり、中には禁忌恐怖の対象となっていたものもある。

天 テイントガナシ(天帝)

日 テイダガナシ

月 チツチュガナシ、トートウフアイ

火 マチガナシ、ウワーマガナシ

水 ショージヌハミ、水神

木 ヒーヌムン、屋敷神

金 フーチヌ神、ハニヤマ

土 チ(ジ)ーヌハミ、イビガナシ

石 ハミイシ、力石、石敢当

など、いろいろあったのである。

しかし、戦後アメリカによって国家神の信仰が抑制され、仲社の例祭も途絶え、世代の交替、科学万能の時代に入り、自然崇拜は迷信とされ、あるいは継承されることなく、ほとんど消滅し一部にその姿をとどめているにすぎない。⑧ガナシⅡ加那志は奄美、琉球における尊称

一 祖霊崇拜について

湧上元雄氏、山下欣一氏著の「沖縄奄美の民間信仰」によると、

「古代人が島の中での生活は集落(シマ、サトウ)単位に行われており、その小世界の中での信仰は祖霊崇拜と自然崇拜であった。

死者の靈魂はグショウ(後生・あの世)に鎮まつてから後、一定の時期にシマに帰ってくるもので、シマに住む子孫の供養(祭・年忌^{ねんき})を受けるのである。

神と人と自然は一体化し、死後に対する期待が持たので、精神的には極めて安定した豊かな生活を送り得たものであろう。」

と述べている。

祖霊神は一族の最高の守護神として尊崇されてきている。そのために祖霊を慰める供養の「マツリ」があり、十数回にわたる「年忌」が行われるのである。

毎朝、神棚にお初を供えて拝み、今日きょう一日の幸運を願う祈るのである。お初には「ハチ」と言い、茶と水で、そのほか「ウブク（御供）」と言って、その日の朝食をお供えする。唐芋かまのときは「ウブクウム」、御飯のときには「ウブクメー」と言った。

また、よそからのいただきものは必ず神棚に供えてから、家族の者はいただいたものである。

二 天体について

民謡に

アガルテイダ ウガデイ 昇る太陽拜んで
トクヌシマ メーナチ 徳之島を前にして
ウナイガミ ウガデイ 姉妹神拜んで
ワシマ ムドウラ 我が島へ帰ろう
同じく民謡に

チツチュガナシニ ガンタテイテイ お月様に祈願して

よって指示されたものといわれている。

九月の十五夜遊びは相撲や綱引きなどがあり、夜は月見の宴があつてにぎやかであったが、戦争で中断していたのが若者たちの手で復活されつつある。この十五夜遊びは稲作儀礼の意義深い日であつたといわれる。

二十三夜祭は海に近い家庭では祭壇に用いる机や器具を海水で洗い清め、人の踏んでない汀なべの白砂を持ち帰り、その砂で家の周囲を祓はらい清め、残りは線香立てに使う。祭壇は神棚の前か、床の間の前にしつらえ、「シンコダーグ（団子）」をたくさん豆まめ（菓子器）に盛り上げて星を表し、その上に月をかたどった平たい餅もちをのせ、水・洗い米・花・神酒みさけ・線香などをお供えする。お供えが終わると主人が礼拝し、次々と皆礼拝を済ます。

その夜は親類や知人も集まつており、お伽話おとぎや談笑の間に月の出を待ち、月が昇ると礼拝をして、だんごに「洗い米」を付けて配る。「洗い米」を「ア トートウ トートウ」と唱えながら、肩や頭に載せて祈り、だんごを頂いたのである。それが済むと酒宴が始まる。

月の出が十二時を過ぎた夜半になることもあるので、線香河本と決めて十時ごろ終わる家もあった。

フシニ ニゲータテイイ 星に願いを立てて
二親ガナシ ムムユニゴラ 両親様が百世まで長生き
することを願おう

(一) 天と日（太陽）

天と太陽は同一視されていた向きも考えられ天地万物の一切を支配するものとして信仰されていた。

毎朝、東天を拝み一日の健康と幸福を祈り、元たんに初日の出を拝み、一年間の幸運と豊作を祈願し、さらに元朝がんにょうの天気によつて、その年の天候を予測していたといわれている。「テイントガナシヌ ミチュンド」と言つて、わるさをしている子供をたしなめたりしていた。天はすべてをお見通しで悪いことはできないという意味で、わるさをするとな罰が当たるといわれていた。

(二) 月

十三夜、十五夜、十七夜、十八夜、二十三夜、二十六夜などの月待ちの祭りがあり、神月といわれる旧正月、五月、九月にある。この月待ちの祭りは主としてユタに

この祭りは特に島外で生活をしている一族の平安を祈っている。「二十三夜神は軽石」と俚諺りげんにあるとおり、軽石は水に沈まないところから例えた言葉で航海安全の神とされ、船旅をする人は二十三夜に供えた団子についていた米粒を紙に包んで持つて行ったこともあつたと伝えられている。

また、農耕、漁猟の中でも月の信仰は高いものとされている。

(三) 星

星祭りとしては七月七日の七夕祭りがあるが、牽牛けんぎゅう・織女の感覚は薄れ、学問、書道が上達するためのものという意味され、男の子が喜ぶ行事であつた。七夕紙と称する市販の色紙で細いテープを作り、父母を示す長いのを二本、後は短いのを五く六本、または子供の数だけ作る。その日の早朝たんぼへ行き、田芋の葉にたまつている露を取つてきて墨をすり、自分の名前や願い事などを書いたり、また、七夕の歌といわれる和歌、「七夕の天の川遠きわたりにあらねども君が船出は年をこそまで」とも書き、竹の枝に結び、門か庭に立てたのである。この日

のうちか、一〜二日の間に七夕飾りを流す雨が降り、その雨は「七夕流し」といわれている。

世之主の家来四天王の一人屋者真三郎について、「屋者真三郎が死じゃむでいむんな、天じ星なとうてい照らば見より」という民謡があり、人が死ぬと星になるとか、ことに母親が死ぬと星になって子供たちを見守っているとの言い伝えもある。

三 自然物、その他について

(一) 火

火は生活になくなくてはならないものであるが、反対に家財を失い人命にもかかわる恐ろしいものでもある。

火を尊称して「ヒノカンガナシ」「マチガナシ」と言っているが、直接「火」に対する信仰祭事はなく、「ウワーマガナシ」として、「かまどの神」に包含された形で信仰され祭事が行われていた。このことについて、東大名誉教授の窪徳忠氏の「中国文化と南島」によると「火やかまどの神仰は古くから世界の各地で行われて

おり、中国では前五世紀ごろに火の信仰に付随して、火を燃やす場所としてのカマドに対する神聖視から、カマドにも神性を認めたらしい。そして、前三・二世紀ごろに両者が結びついて「カマド神」として今日に及んでいる。また「カマド神」は古くは人々を庇護する神ではなく、常に一家を監視し、人々の罪過を天帝に告げる神とされ恐れられていた。

唐時代以後は善悪双方の行為を報告に行くものと考えられ、カマド神を祀ることによって漸次一家の守護神と変化してきたのではないか。」

と述べられており、首肯することができるのである。「ウワーマガナシ」は家族の無病息災、繁栄、豊作など一家の守護神として崇められ、祖霊神とともに民間信仰の中心となって昔から信仰され祭られてきている。与論島では「ヤーヌヌシガナシ（家の主ガナシ）」と尊ばれ、災厄をほらい、火災から一家を守る神として祭られているといわれている。

1 トークラ（台所）

ウワーマガナシの鎮座しているのは台所であった。一般に茶の間と三畳敷きほどの土間からできており、この

る。

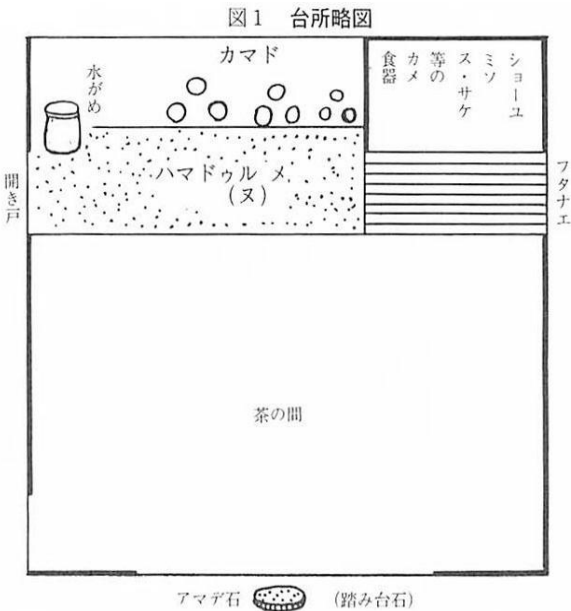
2 ハマドウ（かまど）

かまどは普通三〜四基あつて湯沸かし用の小カマド、副食用の中かまど、主食用（芋）の大かまどがあつて、かまどは二つの石を据え置き、周囲を粘土で固めたきわめて原初的なものである。

かまど石は卵形のマー石（深成岩）で大かまどの石は男がやつと持ち上げることのできるほどのもので、これは出入り口に近い所に設けられる。

3 ウワーマガナシ

ウワーマガナシの祭祀の対象となっているのは、フーハマドウ（大カマド）であつて、他のかまどは信仰の対



土間に大中小のかまどが壁近くに一列に設けられる。壁は土を塗り、カマドの上の方にマツテ（棚）があり、種物やザルなどを載せる。

外との出入り口は引き戸でなく開き戸で、ヒラキまたはモイビヤキ（回転開き）と称し、これはこの土間に神聖なる場であることを示すものであるといわれている。



1. カマド神に洗米を供える
(芳賀日出男氏撮影)

象にならない。

大かまどの構築には三つ石の下に米三粒ずつ敷いて造ったともいわれている。ユタを使う家ではその指示により主婦が粘土で三つ石の周りを手杵で満遍なく搗き固めている。かまど石の霊力は大地との接着が緊密なほど發揮されるもの、との信仰があったからである。

ユタは花米(膳)に米を山のように三つ盛りあげたものを見て、根締めめの緩い個所を指しながら指導し、最後にかまどの前に花米と神酒と香を供え、唱え詞を奏して大かまど造りの神事を終える。

4 アムトウノシ

分家をするときは、移し位牌と塩一升とこの大かまどの灰を分けて持たせる風習もあったようである。

また、家長か主婦が死去した場合には忌明け供養を待つて、大かまどを更新させるのが常であった。その石を更新させることを「世代を交える」「隠居させる」「アムトウノシ」などと言って、古い石は人の踏まない石垣の上や庭の隅などに捨てたといわれている。また、一定の場所に捨てる所もあって、そこをアムトウとか、イビと称していたようである。

家畜が病気になる、かまどの根締めが緩んだためと考え、これを「かまどが破れた」と言って、ユタを迎え根締め固めの神事を行うのが常であった。

5 ウワーマガナシの信仰

幼児を外に連れて行くとき、肩間にナビヒグル(鍋墨)をつけて魔よけにし、旅立つ者はハマドウヌメーに下りて、ハマタ(鍋ぶた)わらや芽で編んだものを主婦が持ち上げ、その下をくぐって開き戸を開けて出発し、旅先の無事を祈り、また主婦を迎え入れるときその家族に加わる証として、鍋ぶたかぶりの神事もあったといわれている。

春秋の播種祭に大かまどにニンニクを供え、その守護と豊作を願い、シヨージ(みそぎ)をする家では「洗い米」を供えて無病息災を祈り、ユタを迎えて口寄せ、神降し、寿願の祭事を行う場合はユタが大かまどに「花米」をお供えしている。

このようにウワーマガナシの御利益は火の神、土神、農耕神などの性格を有するものとして、一家の尊信はきわめてあつく最高の神として信じられていた。

6 ハマドウヌメー(かまどの前の土間)

したがってハマドウヌメーは不浄を嫌い、いつも掃き清められていた。これは松、蘇鉄などの枯れ葉が燃料であったので防火のためであったのである。

煮炊きをするときはハマドウヌメーでかがんで、枯れ葉をさしくべ、ヒヤンタグシと称する細い棒で絶えず灰をかき出し、煮炊きのすむまで離れることはできなかったのである。

夜、寝る前には主婦は必ずこの土間を片付け、明日のための火種として灰の中に埋める「ウツチ」と称する生火を用意し、その前に刃物を置き、火事を起こす魔物といわれている「ヒジヤマ」に火を盗まれないための魔よけとし、水おけを据えた上でなければ寝につくことはしなかった。また、畑に出かけたりするときに、家に残る者に対し「マチガナシヌ デームク ユー シリヨ(火の始末をよくしなさい)」と注意を与えている。

7 祭事

ウワーマガナシの祭りは各家庭で行われ、民族的、社会的機構を持つまでには至らなかった。ただし、知名町竿津の宮持神社の御神体がカマド石であり、毎年字ぐる

みで祭っており、この字には今まで大火事がなかったといわれている。

ウワーマガナシは毎月か、神月の一日・十五日に主婦が祭っていたのが、だんだん減少し、後年になるとシヨージをしている家庭か、ユタを入れる家でもユタに任せようになつてきた。

8 実例

和泊で新築願のとき、土間にむしろを敷き、家族も皆座って、大かまどにたきぎ三本を交差して置き、火を点じ「洗い米」をかまどの石に載せて、ユタは唱え詞の中で「マチガナシ マチテイ オイシャブラ(火の神、祭つてあげましょう。……)」と唱え、おはらいをしたとのことである。このことはウワーマガナシで火を扱ひ、マチガナシと言っており、火の神として祭っている証といえよう。

国頭でアンザウティミジ(東海岸のみそぎをする泉)で、シヨージをして帰り、まず大かまどの右の石から順に「洗い米」と神酒を供え、家族の無病息災と繁栄を祈り、次に神棚、縁側の敷き居に同じように供えている。

根折ではニヤーゴーやメーゴーのみそぎをし、かまど

石に「洗い米」神酒を供えながら「ウヤホンチャ ショー
 ジ シー チャーブタン ド マチテイ オイシヤブ
 ドー ウワーマガナシ ミチユクルニ シヤーテイ オ
 イシヤブラ……」と願い事をしていたというところである。
 (先祖たちよ みそぎをして参りましたよ 祭つてあげ
 ますよ かまどの神 三人に申し上げます……)

表 1. 奄美諸島龍神呼表 (窪徳忠「中国文化と南島」より)

龍郷町	浦	ジロノカミ		
	秋名渡	マツガナシ		
名瀬市	幸町・根瀬部	ヒノエヒノトヒノカミガナシ	ジロンガミ	ヒニヤハンガナシ
	住用村	石原・山間	ユルイノカミ	
宇検村	名柄・田検・芦検	ヒニヤンガナシ・ヒニヤーンガナシ		
	久志	ヒナンガナシ		
大和村	大和浜・津名久	カマドンガミ (マチガナシ・ウチガン)		
瀬戸内町	(天鳥)	古仁屋・久慈・綱野	ヒニヤハンガナシ	
		瀬武	ウチガミ	
	(加計屋島)	実久・芝	ウチガミ	
喜界町	湾			
	中里	ソニヤラシ		
	中間・大朝戸・宮小野・津神	ヒヨニヤラシ		
	池冶			
	赤連	トゥンガラシ	トゥンニヤラシー・シヨウガナシ	ヒヨウガナシ
	坂嶺	ヒヨニヤラシ・ヒヨナラシ・トニヤラシ		
	浦原	ヒヨウガナシ・シヨウナラシ・ミツモン	ヒヨウミガナシ	
	志戸桶	ヒヨウガラシ・ヒヨウガラシ		
	滝川	ヒヨニヤラシ・ヘンニヤラシ・ヒヨニヤラシー		
	小野津・前金久	フィユンガナシ・フィオンガナシ		
	先内	ヒヨウガナシ		
阿伝	シヨニヤラシ			
徳之島町	母間・井之川・諸田神・嶺・亀津・徳和瀬・山・手々	ウ (オ) カマガナシ		
伊仙町	上面縄	ウカマガナシ・ヒンカンガナシ・ヒノカミ		
	検福	ヒノカミ・ヒヌカンガナシ		
和泊町	伊仙	ヤースズ・ヒノカミガナシ		
	和泊・内城・畦布根折・国頭・皆永嶺・谷山・玉手々知名	ウワーマガナシ		
知名町	赤嶺・田皆・住吉新城・瀬利覚			
与論町	茶花・朝戸・古里東	ビヌカン・フィヌカン		
	城	ハマヌメー・ビヌカンガナシ		
	叶	ヒヌカン ビヌカミ		

1. 与論町では、原始的な龍の3石をペアンジャナシとう。なかには、3石と龍神とを同一視して、両者をもにペアンジャナシとよぶ人々もいる。
2. 大和町の括弧内の称呼は火の神である。
3. 喜界町先内・阿伝の称呼は、竹内譲「喜界島の民俗」(90項)による。

喜美留でユタの唱え詞は「アマテラスオオミカミ
 ウワーマガナシニ シヤイアギテイ オイシヤブラ
 オーキモトノ ヤーヤシキウチニ ミーシチ ハナシチ
 カーラヌクトウ ウワーマガナシ ミマモテイタボリ
 ア トートウ トートウ」(天照大神、かまどの神に謹
 んで申し上げます。この本家の屋敷内に目病み、風邪ひ
 きにかならないよう見守ってください。ああ尊い尊い)
 その他の宇でも大同小異で、かまど神の信仰はあつく
 祭られていたが、時代の流れとともに減少し、炊事場も
 ガス使用によってウワーマガナシを祭ることはなくなっ
 ている。それでも国頭やその他の宇でもガスがまのそば
 に小石三つ置いて祭っている家もある。
 台所以外でかまどのように石を三つ並べて祭っていた
 所もある。西原の川口雪蓬翁記念碑の敷地内にアナブイ
 小屋(粗末な小屋)を造り、チヌハミ(地の神)とし
 て祭っていたといわれるが、現在は跡形もない。金毘羅
 神社前のイチントため池のほとりに、ウワーマイシとい
 われた大きな石が三つあったのが、耕地整理の後不明で
 あったが、ため池の中から見つかり昭和五十九年五月に
 神社境内に移された。

内城の伝説「山田大親翁」の屋敷の東南の隅に花崗岩
 のかまど石があり、トタンで簡単に覆いをしてあるが、
 今は空き屋敷で雑草の中にある。かつては二十三夜神と
 して祭られていたといわれる。

(二) 水

水神は水をつかさどり、また火災を防護する神といわ
 れている。水は生活の中で欠くことのできないもので、
 飲料、灌漑、防火、その他の用水として大切にされ、泉
 や井戸、ため池のそばに水神と刻まれた碑か、石を立て
 て尊崇している。

水道の普及で泉、井戸の利用は少なくなり、道路拡張

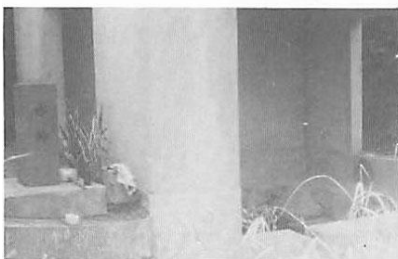


1. 上手々知名のメエダミチにある水神



▲2. ショージ 水で手足を清め、洗米を作って水にささげ、自らの頭にのせる

3 家の外からやってくる先祖に供物をする



◀4. 玉城のウシュゴー (2~4 芳賀日出男氏撮影)

によって井戸を埋めたりしたが、水神の碑はまだ数か所に残っている。ため池にはほとんどなく、手々知名の「アナハタグムイ」にあつたが、埋め立て後見えなくなっている。上手々知名の「メエダミチ」の中に石像があり、光背のある座像できわめて珍しいものである。(写真1)

1 ショージ

ショージを精進、浄水、清水、聖水など土地やユタによっていろいろ使い分けているが、神聖で靈験のある水で、死者も生き返らせる霊水だといわれている。また、霊魂の昇天を妨げる地の神の気持ちをやわらげ、昇天させるためにショージをするともいわれている。

ショージをするということはショージゴーといわれる特定の泉で禊みそぎをするのである。ショージは米と御神酒、線香を泉に持って行き、顔や手足を洗ってから米を洗い、泉のそばに御神酒、線香を供え、洗い米を一つまみ供えて祈る。その洗い米と水を汲んで家に持ち帰り、ウワーマガナシに「洗い米」と御神酒を供え、

汲んできた水とそれで沸かしたお茶と洗い米、御神酒、線香を神棚にお供えして、家内安全、豊作などを祈願している。(写真2)

夕方にはお墓へ行き、「洗い米」は正面と墓石の土台石の四隅にお供えし、花や線香を供え祈願して帰るのである。縁者の墓にも行って同様に行っている。

2 ショージをする人

家人が亡くなつて数日後、ユタを入れ神降しをする家で、ユタに指名された人が行っている。指名された人は死者の氣に入りの者で、「自分の魂を継いでもらいたい」とユタの口を通して告げられる。それは大抵死者の姉妹か娘、孫娘あるいは嫁などで多くは女性である。

神降ろしするとき霊が乗り移り、ユタから指名された人は、そのあかしに「私が生きている間はあなたの霊を守ってショージをします」と誓いを立てる。そして、毎月か、神月(一月・五月・九月)の一日・十五日にショージを行っている。

3 ショージゴー

島の本来のショージゴーは内城のシマゴー、瀬利覚のミチユイ、知名のアダンゴーの三か所で、この泉は「ム

トウゴー」といわれている。

シマゴーは越山南麓で花崗岩を採掘した谷間にあるが、いつのころからか世之主墓の西方の谷間にある「イジュンジョゴー」でショージが行われるようになったといわれている。

後年になると、自分たちの集落近くの泉か、井戸を掘った家はその井戸でショージを行うようになり、ほとんどの集落にショージゴーと称する泉井がある。

それは「ムトウゴー」が、地理的・時間的に不便のため、「神移し」と称して、ムトウゴーから小石か水を汲んで持ち帰り、これからショージをしようとすると泉井に入れてショージゴーを替えている。現在ショージをする人も少なくなっているが、内城のイジュンジョゴーへ遠く国頭から訪れている人もいと聞いている。

水の信仰として全家庭で行われていたのは、正月の若水汲みの行事であるが、主婦が元さんの早朝にショージゴーでショージを済まし、若水をクガニミジ(黄金水)と称し、それを汲んで帰り神棚に水の初、茶の初を供えたものである。また、永吉毅氏の「えらぶの古習俗」によると、改葬のことを「チュラサナシユン」「ウビオイ

シヤブン」などと言っており、「ウビ」とは神聖な水という義で、水を上げるといふ意になり洗骨を意味する。と述べており、水を神聖化していることが分かる。

(三) 木

木の信仰については、多く禁忌恐怖の対象になっているものが多い。古木、孤立した樹木、あるいは、うつそくと茂った森林にはマジムン（魔物）が宿っているとして恐れられていた。

ある種の樹木は屋敷内に植えることたりがあり、植えてはいけないとされているものもあり、ユタの指示によって倒したのもあったようである。また、切り倒したばかりにそれがたたり病気になることの言い伝えもある。

木の精、木の妖怪を「ヒーヌムン」と称し、甲東哲氏選の「沖永良部島民俗語」の中で、「ヒーヌムンは、睡眠中小児もしくは小動物の形をして現われ、身体の上に乗ったとたん自由に身動きができず、呼吸が苦しくなるといわれる。これを「ヒーヌムンニウサユン（圧される）」と「と」と述べられている。

(五) 土

地の神を「チヌハミ」「チヌハミ」などといって、畑の隅や屋敷内の石、古木などが依代として祭られているといわれている。

西原の公民館前に川口雪蓬翁の碑がある（前述）が、この土地を「ヌルジ」と称し、島主の世之主ガナシが休憩し、ミシヨウを飲んだ所で、その後カマド石を置いて、チヌハミとして祭ったといわれている。

地の神は屋敷神とも一体になって、屋敷内に悪霊妖怪



5. ミンジョイシ（手々知名・町田真氏宅）



6. 地の神（手々知名・沖治氏宅）

恐怖の対象でなく、屋敷神として祭っていた家もあったようである。

(四) 金

カジ屋のことを「ハンゼーク」といい、仕事場にはカジ屋の神といわれる「フーチの神」を祭ってある神棚があり注連縄が張られている。お彼岸にフーチヌエーとって洗い米とお神酒を供えて祭っていた。荒神で不浄を嫌い、悪口やわるさをするとたたと恐れられてもいたようである。

西原字の西にティガナシという泉があるが、その近くにアダンがうつそうと茂った丘があり、土地の人々は「ハニ山」と言っており、そこに入るのを避けていた。鹿児島からきた人で和泊のジンシキというカジ屋が、一年のうち何か月かここに住み、鉄くずをこの地に捨てたといわれている。

⑤ 和泊のカジ屋は鹿児島から渡来した人によって経営されていた。ジンシキ屋（前田）カミシキ屋（吉崎）カキチ屋（児玉）の順である。

などが入らないよう屋敷を守護する神として、一日、十五日に米と酒を供えて祭っていたといわれている。

(六) 石

石にまつわる話は、ほとんどの集落に残っている。「ハミ石」や「イビの神」、「チヌハミ」、「屋敷神」、「力石」などの言い伝えがそれである。

その石を家に持ってきて利用したら、けが人、病人が出たので、また、元の場所へ返したという話も残っている。それらの石はノロが押んでいたとか、シニグマツリにお供え物を載せた石であるとか、世之主ガナシが島巡りの際に休んでミシヨウを召し上がった石であるなどの縁起話も残っている。

しかし、こうした石の多くは、土地改造、屋敷改造などで見えなくなっており、わずか数か所に残っているだけである。

1 神石祭

国頭四部地区の田中トヨ氏宅前の道路わきにマー石が祭っており、「イビガナシ」と称し、毎年一月七日の朝に「七日祭り」を隣近所の方々に、山下カネ（明治四十



7. イビガナシ(国頭・昭和57. 1. 7)

年生)、名島アイ(大正二年生)、今井フミ(大正五年生)、田中トヨ(大正十年生)の四世帯がごちそうをつくつてきて、その前にむしろを敷いて、御神酒、洗い米をお供えし、ごちそうの初を上げて、無病息災、家運隆昌、交通安全を祈願している。

2 ヲシヌハミ

国頭の飛行場近くのビシ(地名)のウフニチジ(地名)にある神は、ニーガミ(根神)である。国頭はたいへん貧乏であったが、この神を祭るようになってから豊作の年が多くなったといわれる。ビシの神の御神体は黒い石を三つおいてあっただけであった。船旅をする人の家族は、船出の後ここで海上の安全を祈った。(沖永良部島民俗語)

3 神石と力石

前述したように、神石は野外で神事を行ったときの供

物を載せる台石であったか、依代として使われていたのが、神聖化されたものと思われる。力石は各集落にあったようで、若者たちが力を競ったものである。これらの石に対する神事は別になかったようであるが、「石をシソ(粗末)にするとバチ(罰)があたる」といわれ、持ち帰って他のものに利用すると家族にけが人が出たり、病人が出るので、元の場所へ帰したとの言い伝えもある。しかし、現在分かっているのは大城と瀬名にそれぞれ円形の石三つ、内城に穴のあいた自然石一つでいずれも畑の隅にあって神石といわれている。畦布にあるのは道路わきに円形の石が一つあって力石といわれている。

4 イシガントウ

石敢當と刻まれた石碑で、魔よけとして道路の突き当たりや門に立てられている。高さ約三十五センチメートル、幅約二十センチメートルのウルイシ(サンゴ石灰岩で造られている。道路の場合は樹木が茂って昼でも薄暗く、マジムン(魔物)が出るヌンギドウクル(怖い所)といわれた曲がり角や丁字路の突き当たりや十字路の一角の石垣にはめ込まれていた。

現在、和泊の永吉毅氏宅の裏通りに花崗岩の新しいの



8. 前島氏宅前石垣の石敢當(現在はブロック壁)

が据え置かれていたが、これは昭和五十四年に永吉氏が造られたもので、島にあるものでは最も

も新しいものである。和泊町中央公民館西側の元明屋敷西南曲がり角の前島氏宅のブロック塀にはめ込まれているのがいちばん古いのではないかと思われる。玉城の花田ヤエ氏宅のブロック塀にはめ込んであるのは文字が磨滅して判然としない。国頭の中屋中秀氏宅は門に、同じ国頭の林茂氏宅は庭にそれぞれ立てられている。昔は相当たくさんあったと思われるが、この多くは消失し現在町内に残っているのは以上五基である。

(七) 海

甲東哲氏「沖永良部島民俗語」によると、「ニラーは海のかなたにあるとされた想像上の国童宮で、昔話によれば、ここから稲の種子はもたらされたという。また、ニラーの神は寄木に身をかえること

あり、産児にその一生の位(身分とか運命とかを意味することば)を授けるとされている。

シバナは海上での死者を弔う祭祀で、また海の神のことをシバナ神とよび、海岸の岩礁の上か、海の見える丘で祭事を行っていた。

シバナトトウは穀物が実るのはシバナ神が宿るからだときれ、新穂を取り入れる前後の夕方火を焚いて海に向って祈禱した神事である。

アガリムナジマは旧正月の早朝東の海に見えるといわれる無人島で、ニラーの国だとの言い伝えもある。と述べており、ウミリ(海降り)浜降りの神事もあるところから、人間の生死をつかさどり、農耕神としてもあがめられている高神である。

(八) ヲウナイガミ(姉妹神)

永吉毅氏「えらぶの古習俗」に、次のように述べられている。

「沖永良部島では男の兄弟に対して姉妹をヲウナイ、ヲウナイガナシまたはヲウナイ神などいい、それに対して姉妹から男の兄弟をキイ、キイガナシ等と呼ん

でいる。このヲウナイ（姉妹）には神秘的な力があって、キイ（男の兄弟）を守ると信じられている。それは、沖繩、奄美諸島でもその伝承があつて一般に「なり神信仰」として早くから知られている。

民謡に「あがる太陽^{ていとうが}でいヲウナイ神^{わしまむと}でい吾島^{わしまむと}戻ら」とか、「越山^{こしやま}ぬ頂上^{たかみね}に線香^{せんこう}花立^{はなたち}ていいていヲウナイ神^{わしまむと}でい吾島^{わしまむと}戻ら」とあるように、船旅にはヲウナイ神の守護の力があると信じられ、旅立ちをする時は「姉妹の毛髪^{けがみ}や手巾^{てぬぎ}をお守りとして携行^{けんぎょう}していくという習わしであつた」ようである。

民謡の「稲^{いね}摺^{すり}り節^{ふし}」に「ちばて摺^{すり}りよヲウナイぬチャシキユマ^{しきよま}かみらしゆんど」とある通り、「ヲウナイ」が稲の豊作と家内安全を祈願している報いとして初取り入れの新米飯^{にいぐめい}は「ヲウナイ」が先ず先に箸をつけて戴いた後に他の者は戴くというのであり、農耕儀礼とも関係があり、更に祭祀や予祝儀にも「をなり神の信仰」の習俗があつた。

俚諺に「ヲウナイ神はマササ」というのがあつたが、「マササ」とは神仏の現わす効験にあたる語で、ヲウナイ神の神高き、神々にまさつて兄弟を守護するとの

意で、殊に旅立ちの際この神仰が重んぜられ、船旅に出る時、また出征の際にはヲウナイガミ手サジといつてヲウナイが花染め手サジを男兄弟に渡す風習があり、また、船が遭難した時、ヲウナイ神が白鳥になつて現われ助けたとの言い伝えもある。」

(九) 稲ガナシ

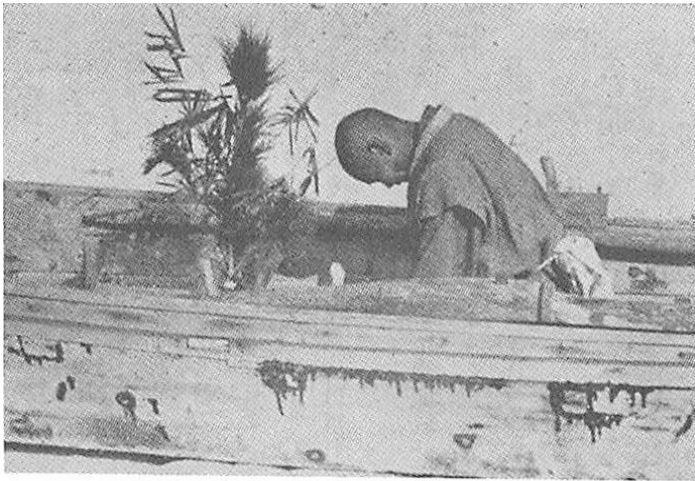
稲米に神聖を認めた尊称で、地母神信仰を基盤とした穀神であり、農耕神でもあり、ユガフ（世界報）をもたらず歳の神でもあつたのである。本島では稲の播種を行う日の夜「ファンダネ祭り」が行われていた。

(十) セークヌエー（大工の神様）

正月二日に床の間に墨さし、番匠^{ばんじやう}矩^{たか}、のこぎりなど大工道具を供え、神酒、米、塩を供えて祭る。

(十一) フナダマ（船霊）ヒナダマガナシ

イユーツイニ（魚釣りの小舟）は帆柱を立てる穴に船の神が宿るとされていた。現代はモーター付きの舟になり、へさきに門松を立てて祭っている。



9. 舟霊を祭る（芳賀日出男氏撮影）

新しく舟を造つて成就したら、寅^{とら}の日を選び、ユタを頼んで祭る。ユタは茅のような草を束ねたもので、舟をくまなく叩いて、「沖永良部島民俗語い」から

- イニヨワ チジュマチ 海で、竜巻
- グジャ ワンサバ ニ 鯨^{くじら}や鱧^{なまこ}に
- イチヨラチ タボンナ 行き合わさないうください
- トートウ トートウ 尊い（祈りことは）
- フヌ ヒナダマガナシワ この舟霊様は
- イチユヌ ウイカラ 静かな波の上から
- トウーチ タボリ 通してください
- トートウ トートウ

と唱え、舟主や大工たちは「虎^{とら}の絵やかきて、柳花活きて、誠はいくだぬジョーグチ（門口）エンヤラアハハー」と歌つて祭事を終える。